

エピクロスと初期エピクロス派

『哲学の歴史』第2巻 古代II「帝国と賢者」

1 紀元前三二三年夏

アテナイの暦は夏至の頃に新年がはじまる。グレゴリオ暦に読みかえると前三二三年の夏、満十八歳 (*ephēbos*) のエピクロスは、アテナイ市民の子弟としての資格審査を受け二年間の兵役訓練をつとめあげて正式の市民権を獲得するために、故郷を離れアテナイにいた。

彼が生まれ育ったサモス島は、わが国の淡路島ほどの大きさの地中海東端に浮ぶ島で、小アジア本土の岬とは目と鼻の先にある。エピクロスの父ネオクレスは、もとはアテナイ地方の農村住民で、およそ三十年前の入植者の一人である。妻との間に四人の子供がいた。

市民資格審査がすむと、鍔広の帽子をかぶり黒い外衣をまとって神殿を巡拝し、重装兵としての戦術や弓術や投槍術や弩砲射撃の訓練をうけ、外港ベイライエウスの要塞を警固する役につく。こうして一年目が過ぎる。だが、その年は……

1.1 同時代人の点描

アレクサンドロス—最強者—神

その年の六月、大王アレクサンドロスはバビロンで重い病にたおれ、地の果てを窮めようと疾駆した三十三年の生涯を終える。死に臨んで「後継者は誰になさいますか」と問われて世界の王者は言った。「最強の男に」。戦いを勝ち抜いた者にということになるだろう。だが孫の世代まで残ったのは、プトレマイオスのエジプト王朝、一時は小アジアからシリア、ギリシアにまで版図をひろげたアンティゴノスのマケドニア王朝、セレウコスのシリア王朝で、アレクサンドロス帝国は分断された。最強者は現われなかった。

ゆえに戦いだけが続く。挑戦者たちには、まずは怯むこと迷うことのない

勇猛果敢さがなければならない。怒髪天をつく覇気がなければ、殺気立った兵士たちを統率できはしないだろう。大王の死後にリュシマコスが最も猛猛な種族の住むトラキアの総督に指名されたのは、この点では最右翼にあると目されていたからだという。

アレクサンドロスは、哲学者カリステネス (この人はアリストテレスの甥である) がペルシア式の跪拝礼に反対したのを怒り、そこに謀叛の臭いもかぎつけたために、カリステネスの四肢を切断し、耳も鼻も唇もそぎとったうえに、籠のなかに犬とともに閉じこめて見せしめにした。そのとき、かねてカリステネスに師事していたリュシマコスは毒薬を手わたして、カリステネスが自害するのを助けた。アレクサンドロスは激怒し、いちばん猛猛なライオンの前にリュシマコスを放り出した。ライオンはリュシマコスに襲いかかる。リュシマコスは外套で手をくろみ、ライオンの口中に突き入れて舌をちぎり、この猛獣を殺す。

後継者戦争の舞台上に登場するのは、大同小異このようなライオンに比すべき猛者たちであった。

四十箇条からなるエピクロスの『主要教説』 (*kuriai doxai*) の第一番 至福にして不滅なるものは悩みわずらうことなく、また他をわずらわすこともない。したがって、怒りに動かされることもなければ、慰撫され喜ぶこともない。すべてこれらは弱者においてのみあるものだからだ。

「慰撫され喜ぶ」と訳したカリス (*charis*) という言葉の原義は「喜び」で、そこから喜びを与えるものとしての優雅な姿、親切、寵愛、恩寵などの意味が、また受け取る側に立った場合の感謝、好意の意味が派生する。ここは「神々の怒りをなだめ、喜ばす」という含みがあって、神を祀り供物を捧げるなどの行為を指している。さらにまた、アレクサンドロスのよく知られたエピソードの連想もある。大王は宴席での諍いから激昂して乳兄弟であったクレイトスを刺殺、殺したあとで激しい悔恨にうちめされた。ここにもう一人の哲学者が登場し、懊悩する大王を啜う。アレクサンドロスをゼウスになぞらえ、ならばその行為はすべて正義なのだという、とんでもない話をして悲歎をやらせた。アレクサンドロスの東征に同行した哲学者はカリステネスだけでなく、アナクサルコス (とその有名な弟子のピュロン) がいた。アナクサルコスは原子論誕生の地であるアプデラ出身の哲学者で、ことごとくカリステネスと反目し、ペルシア式儀礼の採用に賛同した御用学者である。とはいえ、これも一筋縄でいかない人物であった。世界 (*ta onta*) を芝居の背景画になぞらえ、夢や狂気による幻影のごときものとみなしたというから、ほとんどシエ

イクスピア劇の登場人物、宮廷道化の先駆者である。

後継者たち

アレクサンドロスの死後に残されたのは莫大な財産と毎年の帝国の税収、つまりは無尽蔵の軍資金、そしてアレクサンドロスと彼の父ピリッポスを選びすぎた精悍な男たちである。彼らはいずれも剛毅な、戦うために生まれたかのような者たちで、しかも容姿のすぐれた美丈夫であったという。ある者にいってはおのれを神の子と信じ(セレウコス)、また武人の名誉を競いあった(プトレマイオスとデメトリオス)。まるで英雄神話時代に逆戻りしてしまったかのようなのだ。

この男たちは何よりも恐るべき精力の持主で、四十二年後の決戦(二八一年)で敗死したリュシマコスは七十四歳。勝利したセレウコスは翌年に謀殺されるが、そのとき七十七歳になっていた。だが最も驚異的なのは、モノプタルモス、すなわち「隻眼」(独眼竜といったところだろうか)の異名をとったアンティゴノスだ。彼はアレクサンドロスの父ピリッポスと同年輩、大王逝去の年すでに五十九歳であったが、ゆうに青年をしのぐ活力で後継者戦争の主舞台を駆け巡る。そして三〇一年、プトレマイオス、セレウコス、リュシマコスの連合軍に対峙したイプソスの戦場で孤立無援、槍ぶすまになって最期をとげたのは、齢八十一のときである。

この天下分け目の決戦で敵を深追いし、みすみす父を死なせてしまったアンティゴノスの子デメトリオス(「城攻めの名手」ということでポリオルケテスと綽名された)は、軍事的技術的才能にあわせて、容姿端麗なことと荒淫放埒なことでもアルキビアデスの再来と評された。彼の生涯はありあまる才能の一大浪費の観がある。

三二三年に戻ると、大王が逝去したバビロンでは、側近護衛官(*sōmatophylax*)たちを中心に協議がなされている。バビロンの遠方にいる宿老たちはまだ王の死を知らない。会議を主導したのはベルディッカスで、病床のアレクサンドロスから印璽の指環を受け取って大王代行を務め、直属の部下にセレウコス、同輩にはプトレマイオス、リュシマコスその他がいた。妥協が成立する。懐妊した皇妃ロクサネの男子誕生と成長を待つ間、大王の腹違いの兄弟アリダイオス(この人は精神に異常があったという)を新たにピリッポス三世として王に立てる。実権を握ったベルディッカスは宿老グループばかりか、やがてプトレマイオスとも対立する。まず大王の遺骸を奪ったプトレマイオスのエジプトに侵攻するが、ナイルの渡河に失敗して兵士の信を失い幕舎で暗殺され

る。わずか三年後のことである。

「肉体の声—飢えを、渇きを、凍えをなくせ。これを実現し、また将来も実現しつづける望みがあれば、ひとはゼウスが相手であろうと、幸福を競うことができるだろう」(『ヴァチカン箴言集』)

約二十年後、アテナイ郊外の庭園には、エピクロスを筆頭に、メトロドロス、ヘルマルコス、ポリュアイノスの四人の指導者(*katēgemōn*)たちがいる。これは序列と指導系統を重んじる点で軍隊にみえないこともない。だが彼らは頑健とはおよそほど遠い。メトロドロスもポリュアイノスも、またエピクロスの兄弟たちも早世している。しかし、ここに集った人々は死を怖れなかった。「死はわれわれにとって何ものでもない」(『主要教説』2)。

死はわれわれといかなる関わりももたないと思えることに慣れよ。なぜなら、善も悪もすべて感覚なくしてはありえず、しかるに死は感覚の途絶にほかならないのだから。それゆえ、死がわれわれにとっては無であると正しく認識することは、生の「死すべき定め」を楽しみにかえる。その認識が生に無限の時を付け加えることをやめ、不死への憧れを取り除いてくれるからだ。生なきことに何も恐れるものはないと本当に正しく把握すれば、生のうちに恐れるものも何もない。

—『メノイケウス宛書簡』124-125

女たち、子供たち

後に残ったのは男たちだけではない。野心と権謀術数にけっして無縁ではない女たち—アレクサンドロスの母、妹、腹違いの妹たち、従姉妹、妃がいる。ほかに大王の男子を産んでいたバルシネという側室もいたが、いちはやく皇妃ロクサネに殺される。彼女らはことごとく悲惨な最期をとげたが、しかし運命に翻弄された哀れな女人たちではない。みづから死地にとびこんだのである。

母后オリュピアスは早い時期からマケドニアの摂政アンティパトロスと反目し、娘のクレオパトラをベルディッカスに嫁がせようと画策する。これはベルディッカスの死によって頓挫し、クレオパトラはこのあと十五年にわたってアンティゴノスの監視下にとめおかれた。また従姉妹エウリュディケは母とともにアジアに渡り、廃人同然のピリッポス三世と結婚し夫に代って王として振る舞う。

アンティパトロスが世を去ったのち、その子カッサンドロスと後継摂政ポリュペルコンの争闘がはじまる。オリュンピアスは摂政側を抱き込む。一方、傀儡王の若妻エウリュディケはカッサンドロスと組み、三一七年みずから兵を率いて摂政軍に挑んだが、自軍の兵士たちがオリュンピアス側に走り自害に追い込まれる。オリュンピアスもまた勝利に酔ういとまもあらばこそ、カッサンドロス軍に包囲され籠城数ヶ月、ついに降伏し処刑される。三一〇年、少年に成長した大王の遺児と母のロクサネはカッサンドロスによって、ひそかに闇に葬られる。三〇八年クレオパトラは、エジプトのプトレマイオスのもとに逃れようと脱出をはかるが、アンティゴノスの下知により殺害される。ただ一人、カッサンドロスの妃となった腹違いの妹テッサロニケだけが天寿をまっとうするかにみえたのだが。

二九六年、テッサロニケはわが子の手にかかって世を去る。その頃エピクロスの庭園は十二年を経過していた。そこには少なからぬ女たちがいて名前も知られている。レオンティオン、マムマリオン、ヘデア、エロティオン、ニキディオ……。これらはいわゆる源氏名である。女性のメンバーはピュタゴラス派またプラトンのアカデメイアにも先例があるが、もと娼妓 (*hetaira*) であったものを受け容れたのはエピクロスのほかにはない。

—— なんだかハーレムみたいではないか。そのご婦人たちは何をしていたのかね。

エピクロスの教本を読み、暗誦していた。エピクロスはその哲学を教え広めるために教説の要約をつくり、弟子たちに暗誦するよう勧めていた。とくに彼の自然哲学の著作（『原子と空虚』など）や大著『自然について』に詳細にわたって目を通す余力のない初心者だけでなく、枝葉に拘泥せず森を全体としてくりかえし眺めることは上級者にも必要なことだと説いている。

エピクロス哲学は、特定の人びとだけを相手にしたものではなかった

若いからといって哲学するのを遅らせてはならない、年老いたからといって哲学に倦むことがあってはならない。なぜなら、魂の健康をめざすのに誰も時期尚早とか、機を逸したということはないからだ。まだ哲学する時ではないとか、その時機はすでに去ったと言う人は、幸福に向かう時節がまだ来ていないとか、もはやその時はないと言う人とかわらない。それゆえ、老いも若きも哲学しなければならぬ。老いては、かつて起こったよきことどもに感謝することにより清新な生気を取り戻し、若くしては、未来への恐れを克服することにより老成するために。

哲学にとっては老若の違いがないように、男女の間にも、また自由人と奴隷の間にも違いはない。

著作活動をした女性もいた。メトロドロスとの間に一男一女を儲けたレオンティオンは、テオプラストス反駁のパンフレットを書き、また、庭園のメンバーではないが、エピクロス派のもう一つの拠点であるランブサコス（注）の貴婦人テミスタには栄華の空しさを論じた著作があり、これらはローマ時代にも読まれていた。

子供たちもいた。こんな手紙が発見されている。

私とピュトクレス、ヘルマルコス、クテシッポスは無事にランブサコスに着いて、テミスタやその他のお友達に会いました。みな元気になっています。君もママもお元気でしょうね。パパやマトロン [おそらく召使] のいいつけをいつものように、ちゃんと守りなさい。いいですか、私もほかの人たちもみな、君のことが大好きなのは、いつも君がききわけがよい子だからですよ。

これはエピクロスではなく、とりわけ優しい人柄だったというポリュアイノスが書いたものだろうと言われている。

1.2 ラミア戦争

大王の死が報ぜられた三二三年の夏、アテナイは騒然としている。親マケドニア派は不穏な動きを懸命に鎮めようとした。

—— 王は死んでいない。もし死んでいるならば、世界に死臭がただよっているはずだ。—— 今日死んでいるのであれば、明日も明後日も死んでいる。アテナイ市民よ、あわてふためくな。

しかし不穏な動きは前年の夏からはじまっている。オリュンピア大祭の幕開けに、アレクサンドロス大王の亡命者帰国命令が布告された。「ギリシアの国々から追放された亡命者のうち、同胞市民を殺めた者を除き、全員がそれぞれの祖国に帰ることを許し、帰国を許さぬ国があれば強制措置を講じる。すでにこの件についてはアンティパトロスに申し渡してある」と。競技祭に集まっていた二万人の亡命者は歓声をあげた。そしてこのときから、アテナイの将軍はひそかに戦争準備を開始する。

この頃、デモステネスは収賄の罪（おそらく冤罪であった）に問われ罰金刑に課せられるが、もとより払える額ではなかった。とすれば、牢獄につながれ

るほかない。デモステネスは逃走する。追手が近づき見れば彼の敵どもである。ついに追いつかれ観念したデモステネスにかつての仇敵は路銀を渡して、再起を期するよう激励する。デモステネスは、はじめて声をあげて泣いた。

亡命先で、わざわざ教えを請うために訪れた青年に言う。

——ここに二つの道があり、一方は死に通じ、他方は演壇と集会に通じている。後者が恐怖と嫉妬、誣告と誹謗に充滿していることを、もしおれがはじめから知っていたなら、迷わず死の道の方を選んだらう。

その舌の根も乾かぬうちにデモステネスは、アレクサンドロス逝去とアテナイの対マケドニア戦争決議を知ると、反マケドニア連合のために諸国を説いてまわる。かくて彼の帰国はアテナイの民衆によって歓呼の声をもって迎えられた。マケドニアの軍勢を率いるアンティパトロスには油断があったのだらう。アテナイ軍に打ち破られ、テルモピュライの古戦場の北方ラミアに籠城し、援軍を待つほかなかった。しかしアテナイの緒戦の勝利は長くは続かない。

ラミア包囲軍は将軍レオステネスが投石に当たって死ぬとまたたく間に瓦解し、アテナイは無条件降伏を強いられる。戦争を使嚙したデモステネス、リュクルゴスその他の雄弁家たちの引渡しを要求された。リュクルゴスは処刑の前に舌を切り取られ、デモステネスは自害する。アテナイを制圧したアンティパトロスは市民資格を財産所有者に制限し、こたびの戦争を導いた下層市民から参政権を剥奪し、要塞にはマケドニア部隊を駐屯させた。

エピクロスには兵役を終了し正式の市民権を獲得したのちにはアテナイで身を立てる目算があったかもしれない。しかし兵役の二年は無駄に終わる。財産制限が設けられたから、おそらくエピクロスの市民権は棚上げされたらう。

年表

348/7	プラトン没、後継学頭スベウシッポス	
345/4	アリストテレス、テオプラストスとともにレスボス島のミュティレネへ	
343/2	アリストテレス、マケドニア宮廷に招聘、王子アレクサンドロスの教師となる	
341	エピクロス生	
339/8	スベウシッポス没、後継学頭ケセノクラテス	
338		カイロネイアの戦い
337/6	アリストテレス、アテナイに学園(リュケイオン)創設	
336		ブリッポス暗殺、アレクサンドロス即位
334		アレクサンドロス東征開始
334/3	ストアのゼノン生	
323	エピクロス満18歳、アテナイに	6月アレクサンドロス(33歳)バビロンにて逝去 一週間後近臣グループのバビロン会議、ベルディッカス主導権掌握。プトレマイオスエジプト総督(太守)、リュシマコストラキア総督に。歩兵部隊との妥協により、アレクサンドロスの異母兄アリガイオス王に擁立さる。歩兵軍団長メレアグロス抹消。
	アリストテレス、アテナイ退去	
322	アリストテレス没。後継学頭テオプラストス(以後36年間)	ベルディッカス、エウメネスと合流。カッパドキア、パフタルギア征服。
	デモステネス自害	クラテロス、アンティパトロスと合流。8月ラミア戦争終結。
321	エピクロス、コロボンへ。	年末、サモス島43年前に復帰。 春ベルディッカス、東ベシディア征服。
320		8月アンティゴノス訴追され、アテナイ経由でアンティパトロスおよびクラテロスと合流。 ベルディッカス、キリキア経由でエジプトへ。 アンティゴノス、小アジア西岸確保。 クラテロス、カッパドキアで戦死。 アンティパトロス、ベルディッカス追撃。

	ペイトンによるペルディッカス暗殺、プトレマイオスと講和。		エピクロス、ランプサコスへ
319	ペイトン、シリア帰還。トリパラデイス会談 アンティゴノス、アジア代王(監視役カッサンドロス)、アンティパトロス筆頭総督(マケドニア)、プトレマイオス(エジプト)、ペイトン(メディア)。冬、エウメノスをノラに攻囲、会談。 夏、セレウコスとエウメノスを除くペルディッカス派全滅。 アンティパトロス没。ポリュベルコンの後継指名。	309 308 307 306	ポリュベルコン、ペロポネソスに撤退 6月デメトリオス、アテナイ解放。 デメトリオス、キュプロス攻囲(ポリオルコスの異名をとる)
318	春、アンティゴノス、リュディア(クレイトス)攻略。 エウメノス、カッパドキアより脱出。 攻守連合—カッサンドロス、アンティゴノス、プトレマイオス、リュシマコス ポリュベルコン、エウメネス、クレイトス。 冬、クレイトス、ビュザンティオン海戦に勝利するも、陸路マケドニア道中で逮捕処刑。 エウメノス、フェニキア経由でメソポタミアへ。アンティゴノス追撃	305 304 303 302 301	エピクロス、アテナイ帰国 10月デメトリオス(アンティゴノス)、エジプト攻略、失敗。 ロドス問題。 アンティゴノス、ロドスと講和 デメトリオス、ペロポネソス遠征。 春イストモス会議 イブソスの戦い、アンティゴノス(81歳)戦死、デメトリオス敗走。エペソスへ、さらにアテナイに向かおうとするも、アテナイ受け入れ拒否。対リュシマコス戦。娘ストラトニケをセレウコスに嫁がせる。
317	カッサンドロス、アテナイ制圧(パレロンのデメトリオス)、マケドニアへ。 オリュンピアス、ピリッポス王とエウリュディケを殺害	296 294	カッサンドロス、及びその子ピリッポス没。 デメトリオス、アテナイ(独裁者ラカレス)を兵糧攻め。カッサンドロスの子アレクサンドロスを殺し、マケドニア王に(~287)。ピュロスとの戦い。リュシマコスの長子アガトクレス、副王に。
316	パライタケネの戦い。	288 287	デメトリオス、アテナイ攻囲。ピュロスとの戦いに敗れ、アンティゴノス・ゴナタスにギリシア統治委譲。
315	冬、ガビエネの戦い。エウメネス処刑。 春、カッサンドロス、マケドニア制圧、オリュンピアス処刑。 秋、反アンティゴノス(セレウコス、プトレマイオス、カッサンドロス、リュシマコス)連合。	285 283	プトレマイオス、二世(ピラデルポス)に譲位。デメトリオス、セレウコスに降伏。シリアに軟禁。 デメトリオス(54歳)没。リュシマコス、アガトクレスを毒殺。
314	アンティゴノス、テュロス宣言。	281	クルベルディオンの戦い—リュシマコス(74歳)とセレウコス(77歳)、前者の敗死。セレウコス謀殺さる。
313	アンティゴノス、ギリシア都市解放政策開始。		アンティゴノス・ゴナタス、マケドニア王に。
312	甥ボレマイオスをボイオティアに派遣。		
312	未、ガザの戦い、ペイトン戦死。		
311	夏、四者統治体制(カッサンドロス、リュシマコス、プトレマイオス、アンティゴノス)。 カッサンドロス、少年アレクサンドロスをロクサネもるとも殺害。 セレウコス、バビロンへ逃れる。	276 271/0	エピクロス没。
	エピクロス、ミュティレネーへ		
310	セレウコス、プトレマイオスと同盟		